投稿規定（平成十一年五月十五日改訂）

さる平成十一年五月十五日の総会において、投稿規定が改定されました。今後のご投稿にあたっては、この規定にそってご執筆をお願いいたします。なお今回の改訂箇所は、四、執筆要綱bとiの二ケ所です。ゴチックで表記いたしましたのでご留意ください。

（編集委員会）

一　本誌に掲載する論文は医史学研究に貢献しうるもので他誌に未発表のものとする。

二　投稿者の資格は共著者も含めて本学会会員とする。ただし編集委員会が特に認めたものはこの限りでない。

三　原稿の区分は、原著・総説・研究ノート・広場・資料紹介・消息等とし、その採否は編集委員会が決定する。原著・研究ノートは編集委員会の委嘱する審査委員が査読し、それにもとづいて採否および区分を編集委員会が決定する。

四　執筆要項

a　原稿は二〇〇字または四〇〇字詰め縦書き原稿用紙を使用のこと。ワープロ（縦書）の使用も可。一行は二〇字または四〇字とし行数を原稿に記すこと。

b　原著・総説・研究ノート・広場・資料の場合は、欧文表題・ローマ字著者名を原稿の末尾に記すこと。**さらに原著および研究ノートにおいては欧文要旨（二五〇語以内）と和文要旨（欧文要旨の対訳、およそ三〇〇字）を添え、その末尾に表題および要旨から選択した和文のキーワード（五語以内）を記すこと。**

c　欧文題名・欧文抄録での日本人名の表記については、五　外国語原稿のe項に準ずるものとする。

d　原稿の末尾に著者の所属および連絡先を記載すること。

e　表記は原則として常用漢字・人名用漢字以内で、新かなづかいを使用する。難字は欄外にも楷書で別記する。

f　外国人の人名・地名は、よく知られたもののほかは初出の箇所に原綴またはローマ字を添えることが望ましい。

g　図・表は明瞭に書き、写真は原則として白黒の紙焼きとする。裏には著者名・番号・天地を明記し、挿入位置を原稿中に明示すること。

h　注・参考文献は末尾にまとめ、本文初出順に算用数字の通し番号（1）、（2）…をつけて、照合の便宜をはかること。

i　参考文献の引用の仕方は、①雑誌の場合は、著者名・論文題目・雑誌名・巻・号・頁・年次（西暦・和暦いずれも可）の順に書く。②単

行本の場合は、著者名・書名・該当頁・発行所名・発行地・年次を記載する。③編著書の場合は、著者名・論文題目・著者名（編者名）・該当頁・発行所名・発行地・年次とする。④古文献の場合、江戸時代以前の国書については、原則として、編者名・書名・成立年・刊行年（もしくは抄写年）・発行者名・発行地など、必要ならば該当丁（葉）あるいは頁数もしくは項目名を記し、稀覯本については所蔵者名も明記すること。清代以前の漢籍（和刻本・日本写本も含む）についても、前記に準ずる。

（例）

【雑　誌】宗田　一「司馬江漢の西遊をめぐって」『日本医史学雑誌』三〇巻四号、四二五～四三一頁、一九八四（または昭和五十九年）

【単行本】富士川游『日本医学史』五四頁、形成社、東京、一九七二（または昭和四十七年）

【編著書】大塚恭男「中国医学の伝統」村上陽一郎編『医学思想と人間』（知の革命史6）六三～九四頁、朝倉書店、東京、一九七九（または昭和五十四年）

五　外国語原稿

a　外国語原稿は、原則として英語・独語・仏語いずれかとする。

b　外国語の原稿は原則として、一行約六五字、一頁に二五行、ダブルスペース（一行おき）で印字する。

c　イタリック・ゴシック・ギリシャ文字等はかならず朱筆で指定する。

d　日本語・中国語を欧文表記する時は、初出の箇所に漢字を付記する。

e　日本人名を欧文表記する際には原則として名を先に、姓を後とする。ただしそれが不自然な場合はケース・バイ・ケースで扱って差し支えない。

f　中国語の欧文表記は、現代中国語音のローマ字綴り（ピンイン式）とする。引用文献がウェード式の場合は、この限りでない。

g　注・文献・図表については、和文原稿の規定に準ずる。

h　題名中に書名が出現する場合は引用符“　”で囲み、イタリック体を使用しない。

（例）

【雑　誌】Nutton, V.: Galen in the Eyes of His Contemporaries, Bulletin of the History of Medicine. 58: 315-324, 1984.

【単行本】Temkin, O.: The Falling Sickness; a History of Epilepsy from the Greeks to the Beginnings of Modern Neurology 2nd ed. 25-40, Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1971.

【編著書】McC. Brooks, Ch. and Levey, H.A. Humorally Transported Integraters of Body Function and the Development of Endocrinology. 183-238 *in*

McC. Brooks, Ch. and Cranefield, P.F. (eds): The Historical Development of Physiological Thought. Hafner, New York. 1959.

六　投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七　著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は印刷上の誤植を訂正するに留め、原稿の改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責了とみなす。

八　刷り上がり一〇印刷ページ（四〇〇字詰原稿用紙で二四枚）までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九　論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

一〇　原稿の送り先

〒二三-〇〇三三　東京都文京区本郷六―一七―九　本郷綱ビル二階

財団法人日本学会事務センター学会共同編集室内、

日本医史学雑誌編集委員会

編集後記

第一〇二回総会の抄録号をお届けする。

一昨年の記念すべき第一〇〇回（東京・順天堂大）と昨年の再出発というべき第一〇一回（京都・府立医大）の盛会のあとをうけて、今総会開催にあたり、吉田忠会長以下、準備委員会の方々にはずいぶんお骨折りいただいているように仄聞している。その甲斐あって、蓋を開けてみれば一般演題が第一〇〇回の七六題に次ぐ七二題の多きを数え、まずは喜ばしい▼しかしながら、昨年の学会会報でも厳しい指摘があったように、近年では質疑応答の不活発や時間超過というかたちで、演題の多さが負の側面を呈する事態もめずらしくない。演者にとっては勿論、聴講者にとっても、また学会の水準維持の点からも、的確かつ簡潔な質疑は不可欠のものである。質疑成立の前提は各演者の時間厳守である。自戒も含めて、一層の注意を促したい▼編集委員として抄録号の校正を分担していて、とくに私のような横文字に弱い者が感じること（理解できること）は、主として漢字表記にかかわる問題である。紙面超過が問題となることもあるが、これは改行をやめる等の措置により回避できることが多い。原稿自体の表記の不審は、校正者の慊焉たる思いとともに残ることになる▼ともあれ藩政時代、二高・医専・東北帝大時代以来の医史に富む仙台にふさわしい、実り多き総会にしたいものだ。多くの会員諸氏の「来仙」（準備委員会からの演題受領のはがきで知ったことば）を願うものである。

（町　泉寿郎）